小矢部市長
桜井 森夫

アウトレットモールを起爆剤に
歴史あるまちの再生を目指す

金沢市や津幡町に隣接する富山県小矢部市。一昨年夏に三井アウトレットパーク北陸小矢部がオープンしたことで俄然注目度がアップし、訪れる機会が増えたという人も多いのではないだろうか。アウトレットモールの誘致に成功した桜井森夫市長を訪ね、お話を伺った。

小矢部市長
桜井（さくらい） 森夫（もりお）氏

1954年 小矢部市生まれ
1978年 九州産業大学工学部卒業
2002年 小矢部市議会議員に初当選
2006年 小矢部市長に初当選、現在3期目
座右の銘は「一生に限りあり、感謝に限りなし」

交通の要衝として発展 歴史ロマンが香るまち

富山と石川の県境に位置する小矢部市は、いわば富山県の西の玄関口。古くより交通の要衝として知られてきました。加賀藩主が参勤交代で行き来した北陸道の宿場町として繁栄、現在は北陸・東海北陸・能越の各自動車道がクロスしています。

昭和37年に石動町と砺中町との合併により生まれ、人口は約3万人。豊かな歴史資産があることがまちの自慢です。桜町遺跡は縄文史を塗り替えたといわれるほどの大発見でしたし、木曽義仲が平家の大軍を打ち破った倶利伽羅峠の合戦も全国的に有名。義仲と巴御前の物語をNHK大河ドラマにと、実現を目指して頑張っているところです。

それ以外にも前田利家の弟、秀継が築城した今石動城、加賀藩の藩倉が置かれたことなど歴史的エピソードが多く、石動曳山祭・津沢夜高あんどん祭・獅子舞といったすばらしい祭りが今に受け継がれています。その一方、118mの高さを誇るクロスランドタワーもあり、新旧が程よく融和しているまちと自負しています。基幹産業は農業ですが、繊維産業も盛ん。スポーツウェアメーカー、ゴールドウイン発祥の地でもあります。

アウトレットモール開業で活気と期待がまちに溢れる

とはいえ近年は他の地方都市の例に漏れず、やや元気をなくしている状態でした。私が市長に初当選したのは平成18年ですが、就任直後に実施したタウンミーティングでは、「交通の要衝を素通りされている」「買い物する場も食事する店もない」と活性化策を求める声が圧倒的でしたね。

では何がいいのか。地元事業者と競合せず、共存共栄できるもの。さまざまな案を検証して行き着いたのがアウトレットモールです。早速誘致に乗り出しましたが、大都市でも大観光地でもないために最初は全然取り合ってもらえませんでした。「北陸の人は冬の間はこたつから出ないのでは?」。そんな言葉まで聞かれましたが、あきらめず上京のたびに訪ねて熱意を伝え続けました。

それがついに叶い、平成27年7月、誕生したのが「三井アウトレットパーク北陸小矢部」です。まちの将来に危機感を抱いていた地元商工会から協力を得られたことや、三井側が地方の活性化に貢献したいとの思いを持っていたことなどが後押しとなって開業に漕ぎ着けられたのだと思っています。

当初の予想は、年間来場者数3百万～3百50万人。ところが蓋を開けてみれば初年度、推定ではありますが6百万人を下らないという、うれしい誤算でした。そのうち約6割が県外客。交流人口の拡大や雇用の創出、知名度向上などに大いに寄与してくれています。それまでは富山県民が金沢へ買い物に出かけていたのに、倶利伽羅トンネルを通る車の量が逆転。石川県側からこちらに来る車が増えたのです。

「住みよさランキング2016」(東洋経済オンライン)についても188位から28位へと急上昇し、びっくりしましたね。最近は他の商業施設やホテルなども集積しつつあり、地元産業との連動をさらに強めていかねばと考えています。

石動駅舎に図書館を併設 中心市街地活性化も狙う

また、あいの風とやま鉄道の石動駅周辺の再整備計画も進行中です。石動駅舎の改築に合わせ、老朽化していた市民図書館を移転・合築。平成30年度末の完成をめどに交通・交流の結節点の創出を図ります。

石動駅は中心市街地の核として機能してきましたが、時とともにかつての求心力が薄れていました。そこで年間5～6万人の利用がある図書館を併設し、駅の南北を結ぶ自由通路を設置。駅周辺を「メルヘンの街おやべ」のイメージで整備しながら賑わいの創出を図ろうという取り組みです。駅周辺が変われば人の流れは間違いなく変わる。図書館利用者数7～8万人を目標に市街地の再生を進めると同時に、アウトレットモールと駅を線で結び、そこから賑わいが面となって広がっていくことを期待しています。

北陸新幹線が金沢まで開通し、首都圏から北陸へ来る人が一気に増えました。当市にもぜひ足を運んでいただきたいですね。まちの魅力をさらに磨き、存在価値を高めていけるよう努力していきたいと思います。

まちの再生を目指して、職員と知恵を絞り合う